

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名	ZHANG Sujuan
学位	博士(文学)
学位記番号	新大博(文)第13号
学位授与の日付	令和3年3月23日
学位授与の要件	学位規則第3条第4項該当
博士論文名	現代中国語の可能表現について — “能”と“会”の意味特性及び両者の使い分けを中心に—
論文審査委員	主査教授 朱 継征 副査教授 大竹 芳夫 副査准教授 江畑 冬生

博士論文の要旨

本論文は、対照言語学の視点から、中国語の可能助動詞“能”と“会”の文法的使い分けを制約する要因と意味的相違を体系的に明らかにすることを目的とする。

“能”と“会”に関する先行研究において、①「能力」を表す場合、“能”は数量詞と共起できるのに対して、“会”は共起できない、②「許可」を表す場合、“能”しか使えず、“会”は使えない、③「可能性」を表す場合、両者とも使えるが、意味的相違は明確に説明できない、などの説が提出されている。諸説はそれぞれ、可能助動詞の一側面だけを個別的、断片的に考察するにとどまり、両者の使い分けを制約する深層的要因を掴んでおらず、両者の意味的相違を統一的、かつ合理的に説明できていない。

本論文は、「能力」、「許可」、「可能性」を何れも可能表現の下位概念として捉え、“能”と“会”の使い分けを制約する深層的要因は同じものであることを明らかにする。さらに、“能”と“会”と諸構文要素との共起関係を考察、分析するという対照言語学の手法を採用し、その深層的要因と意味的相違に関する研究を展開する。

本論文は次の7章から構成される。

第1章 序章

第2章 先行研究の分析及びキーワードの定義

第3章 「能力」と「可能性」について

第4章 「能力」を表す“能”と“会”の使い分けについて

第5章 「可能性」を表す“能”と“会”の使い分けについて

第6章 “能”と“会”の語用論的機能の相違について

第7章 終章

第1章では、本論文の研究対象となる“能”と“会”の位置づけ、研究目的、研究方法、活用するデータベース及び本論文の構成について述べた。

第2章では、“能”と“会”に関する代表的先行研究の成果を概観しながら、先行研究の問題点を指摘し、また可能のキーワードとなる「能力」、「技能」、「可能性」の概念を論じた。さらに、「可能性」を表す“能”の解釈について、異議を唱えている先行研究に対し、本論文の立場を論述した。

第3章では、先行研究で十分に論ぜられてはこなかった“能”と“会”が表す「能力」と「可能性」の関係について解明することで「能力」と「可能性」の意味分類を行い、「能力」から「可能性」へ展開されるプロセスを明らかにした。

第4章では、まず“能”と“会”が表す「能力」の意味を分類し、両者の類似点と相違点について分析した。また、動作行為を実現する能力がどの水準に達しているかを示す数量詞を「水準数量詞」と定義し、どのような種類の技能を有しているかという技能の種類を表す数量詞を「種類数量詞」と定義した。その上で、“会”は「種類数量詞」としか共起できず、「水準数量詞」と共起できないことを明らかにした。さらに、「能力」を表す“不能”と“不会”の意味的相違を究明した。

第5章では、動作干渉の要素や時間、場所、方式等の外的要因を「外因」と呼び、本能、技能、意志と自然法則による要因を「内因」と呼ぶことにした。「可能性」に影響を与える要因を「外因」と「内因」に二分し、話者の焦点が「外因」に当てられる場合と「内因」に当てられる場合に、どちらの可能助動詞を使うかについて考察した。さらに、“能”は積極性の含意を伴い、“会”は非期待的マイナスイメージであるという先行研究の指摘も統一的に捉え直すことを試みた。

第6章では、実現完了の事柄に“能”と“会”が用いられる用例に着目し、収集した言語資料を調査しながら、実現完了の事柄を表す際の“能”と“会”の使用条件を分析した。さらに、それぞれの使用条件における“能”と“会”の語用論的機能について論じた。

第7章では、以上の考察に基づき、“能”は「外因」に着目し、主体が外部条件の制限を乗り越える可能性を表すものであり、一方で“会”は「内因」に着目し、主体の内的性質または内的必然性、自然法則による可能性を表すと結論づけた。

審査結果の要旨

可能助動詞“能”と“会”の使い分けを制約する要因について、先行研究では、数量詞、時間、場所、方法、手段、動作干渉者、法律、マナー、ルールなど、数え切れないほど多くの要因が挙げられている。これに対し、本論文はこれらの外部要因を「外因」と定義し、「本能」、「技能」、「自然法則」等の内部要因をまとめて「内因」と定義することにより、“能”と“会”の使い分けを制約する深層的要因を体系的に明らかにした。この点は大いに注目されるべきであり、認知意味論の観点から高く評価できる。

本論文による具体的な研究成果は、以下の通りである。

1) 「能力」を表す場合、「能」は数量詞と共起できるのに対して、“会”はできないという定説があるが、筆者である張氏の調査によれば、数量詞と共起する“会”の例文も散見される。そこで、張氏は数量詞を二種類に分け、運動水準を示すものを「水準数量詞」と呼ぶことにし、物の種類を示すものを「種類数量詞」と呼ぶことにした。「水準数量詞」と共起できるのは“能”だけであり、“会”はできない。それは、“能”は運動水準に達する能力を表すが、“会”は運動水準を表せないからである。しかし、“会”は「種類数量詞」と共起できる。それは「種類数量詞」が運動水準を示さないからである。こうした新たな観点からの指摘は注目されるべきものである。

2) 「許可」を表す場合、「動作干渉者、時間、場所、方式、手段、ルール等の動作関連要素の制限を受けるかどうかについての判断なので、“能”は使えるが、“会”は使えない」という定説があるが、その理由については説明されてはこなかった。本論文は動作関連要素を「外因」と見なし、「外因」の制限を受ける場合“能”しか使えず、“会”は使えないことを指摘した。

3) 「可能性」を表す場合、“能”と“会”は文法形式の制限を受けないように見えるため、両者の意味はほぼ同じであるという説もあれば、微妙なニュアンスの相違があるという説もある。しかし、どのような微妙な相違があるのか、体系的に説明されてはこなかった。張氏は多くの実例を分析した上で、「外因」を根拠として「可能性」を推測する場合は“能”を使い、「動作主の意志、性格」、「自然法則」等という「内因」を根拠として推測する場合は“会”を使うことを解明した。このような独創的な視点からの考察・分析により、本論文は「可能性」を表す“能”と“会”の意味的相違を体系的に明らかにしており、高く評価できる。

4) 先行研究は“能”と“会”の一側面だけを捉えており、個別に説明できる場合もあれば、できない場合もある。つまり、両者の使い分けを制約する深層的要因と意味的相違を体系的に解明してはこなかった。本論文は、「運動水準数量詞」、「動作干渉者、時間、場所、方式、手段、ルール」等の外部状況による原因をまとめて「外因」と呼ぶことにし、動作主の「本能」、

「技能」，「意志」，「自然法則」等を「内因」と呼ぶことにした。そして，「外因」に焦点を当てて「能力」，「許可」，「可能性」を判断する場合には“能”しか使えず，「内因」に焦点を当てて判断する場合“会”しか使えないことを指摘して，両者の使い分けを制約する深層的要因と意味的相違を統一的に解明した。

本論文の最大の意義は，可能助動詞“能”と“会”の使い分けを制約する深層的要因と意味的相違を統一的，かつ合理的に解明した点にある。その研究成果は中国語の可能表現に関する研究を大きく一歩前進させたものとして，認知意味論，対照言語学の観点から高く評価できる。

以上の審査結果から，本論文審査委員会は，全会一致で，本論文が博士論文としての水準に達しており，また言語学固有の分野に関する内容の論文であることから，博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断した。